

<b>Title</b>	語彙集・スコットランド啓蒙
<b>Author</b>	白銀, 久紀
<b>Citation</b>	経済学雑誌. 別冊. 112 卷 1 号
<b>Issue Date</b>	2011-04
<b>ISSN</b>	0451-6281
<b>Type</b>	Learning Material
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学経済学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## 語彙集・スコットランド啓蒙

白 銀 久 紀

スコットランドの18世紀はイングランドとの合邦（議会合同 Union of 1707）から始まった。この合邦は、スコットランドが大英帝国の有する広大かつ強固な商業圏に初めて参入することを可能にして経済発展<sup>1)</sup>への展望を開くものであったが、合邦がスコットランドの政治的アイデンティティを奪うものであった以上、改めてスコットランドのアイデンティティを文化的・宗教的に再構築することを要請するものでもあった。

1770年代のスコットランドで一斉に開花した思想的運動・文学的営為・宗教活動・改良事業等々は、後年「スコットランド啓蒙」と命名された。名づけ親であった W. R. スコットはその著『フランシス・ハチスン』<sup>2)</sup>において、フランスとドイツの啓蒙運動と比較しながら「スコットランド啓蒙」なる概念を提出し、フランシス・ハチスンこそはその運動の指導者であると定義した。

表1は「スコットランド啓蒙」期に活躍した人物群像を列挙したものである。活躍した人物の数の多さと多様性、国際的にも抜きん出た質の高さに、あるいは突発的に爆発的な綺羅星のごとき族生の発生態様に、「昨日まで野蛮な国であったスコットランドが一夜にして文明国になった」という往時の人々の感嘆と讃嘆もあながち誇張とはいえない、という思いにわれわれは駆られるであろう。

スコットランド啓蒙の期間については意見の一致を見ていないが、かなり長期の「18世紀半ばから1830年頃」、眩いばかりの成果に恵まれた「1740年から1830年までのスコットランド文化」<sup>3)</sup>と捉えておいても、危ういことはないだろう。表1の人物群像は、知的活動ないし思想運動としては、デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスとを二つの焦点とする楕円状の星雲を構成している。しかし、この啓蒙運動の実質的な担い手は穏健な知識人である大学教授・聖職者・法律家・内科医<sup>4)</sup>か

1) 合邦後、グラスゴウはタバコとリンネルの貿易で繁栄した。タバコについては、C. R. Fay, *The World of Adam Smith*, Heffer & Sons, 1960, pp. 48-55. を、リンネルについては、関 劭『スコットランド経済とアダム・スミス』ナカニシヤ出版1998年、14-20ページを参照のこと。

2) William Robert Scott, *Francis Hutcheson: His Life, Teaching and Position in the History of Philosophy*, Augustus Kelley, 1966 (originally 1900), p. 2, p. 212ff, p. 258ff.

3) T. C. スマウト（木村正俊監訳）『スコットランド国民の歴史』原書房2010年、486、510ページ。  
 (Thomas Christopher Smout, *A History of the Scottish People 1560-1830*, Fontana Press, 1998 (originally 1970))

4) 当時のブリテンでは外科医は医者とは認められないが多かった。

らなる専門的知識人であった。とりわけカルヴァン主義穏健派の聖職者が担った役割は大きかった。反宗教のかたちをとるのが18世紀ヨーロッパ啓蒙の通例であるが、スコットランド啓蒙では科学と学問に信頼を置くカルヴァン主義長老主義の穏健派が優勢であったため、教会人が社会の進歩と「洗練された学芸 sophisticated arts」の発展に寄与することとなった<sup>5)</sup>。

スコットランド啓蒙も啓蒙であるかぎり進歩を標榜せざるをえないが、この標榜がスコットランドの文化的歴史のアイデンティティを考慮しないものであれば、自国の「歴史を欠く」思想ともなりかねない。したがって、スコットランド啓蒙は諸手を挙げて賞賛するわけにはいかないが、その知的活動の驚異は刮目に値する。

本稿では、スコットランド啓蒙の理解に不可欠いくつかの項目を取り挙げて、基本的な解説をする。「語彙集・スコットランド啓蒙」と題する所以である。

表1 スコットランド啓蒙期の群像<sup>6)</sup>

啓蒙主義の源流 : 王政復古期 (1660年～)

スコットランド啓蒙の黎明期

フレッチャ Andrew Fletcher (1613-1716)  
 シャフツベリ伯 Earl of Shaftesbury (1621-83) 哲学者  
 フランシス・ハチスン Francis Hucheson (1694-1746) 哲学

スコットランド啓蒙の開花期 (生年順)

ケイムズ卿 Lord Kames (Henry Home)<sup>7)</sup> (1696-1782) 哲学者・改良家  
 トマス・リード Thomas Reid (1710-96)<sup>8)</sup> 哲学者  
 デイヴィッド・ヒューム David Hume (1711-76) 哲学者  
 ジェイムズ・ステュアート James Steuart (1713-80) 経済学者  
 アラン・ラムゼイ Allan Ramsay (1713-84)<sup>9)</sup> 画家  
 ウィリアム・ロバートソン William Robertson (1721-93) 神学者・歴史学者  
 トバイアス・スモレット Tobias Smollette (1721-71) 作家  
 アダム・スミス Adam Smith (1723-90) 哲学者・経済学者  
 アダム・ファーガスン Adam Ferguson (1723-1816) 哲学者

- 
- 5) B. P. レンマン「議会の合同 ジャコバイト主義 啓蒙主義」(ロザリンド・ミスチン編 (富田理恵・家入葉子訳)『スコットランド史: その意義と可能性』未来社1998年。第5章)によれば、スコットランド啓蒙主義は「積極的に教会と大学を基盤とした運動であり、政治的にも社会的にも保守的であった。特に一八世紀後半に……においては……知識人と交際し、会話を楽しみ著作を読むといった洗練された知性も、求められたのである」(142ページ)。また、スコットランド啓蒙主義は「知識と徳への愛と、信仰と科学に対する敬意」をその指標とする。さらには、「コスモポリタンので上品な振舞を身につけて、社会生活を豊かにし、スコットランドの国際的地位の向上を目指す運動でもあった」(同前ページ)。
- 6) 人物については、主として John W. Yolton, John Valdimir Price and John Stephens eds., *Dictionary of Eighteenth-Century British Philosophers, Vol. 1 & Vol. 2*, Thoemmes Press, 1999 の該当箇所を参照した。マルサスや父ミルが入っているのは、彼等の出自がスコットランドであるからである。
- 7) アダム・スミスは「私たちのだれもがケイムズを師と認める」と言っている。
- 8) グラスゴウ大学道徳哲学講座のスミスの後任。常識哲学 common philosophy の祖。
- 9) 父親は著名な詩人 Allan Ramsay (1686?-1758) で、*The Gentle Shepherd (1725)* の著者。

ジェームズ・ハットン James Hutton (1726-97) 地質学者  
 ジョーゼフ・ブラック Joseph Black (1728-99) 化学者・物理学者  
 ロバート・アダム Robert Adam (1728-92) 建築家  
 ジョン・ミラー John Millar (1735-1801) 法学者・社会学者  
 ジェームズ・ワット James Watt (1736-1819) 蒸気機関の改良家  
 ジェームズ・ボズウェル James Boswell (1740-95) 作家  
 デュガルト・ステュアート Dugald Stewart (1753-1828)  
 トマス・テルフォード Thomas Telford (1757-1834) 土木家  
 ロバート・バーンズ Robert Burns (1759-96) 詩人  
 ロバート・マルサス Robert Malthus (1766-1834) 経済学者  
 ウォルター・スコット Walter Scott (1771-1832) 作家  
 ジェームズ・ミル James Mill (1773-1836) 哲学者・経済学者

## [1] 知識人たちの知的交流

18世紀スコットランド啓蒙期のスコットランドの都市は、永代借地<sup>10)</sup> 制度などが存在したこともあって、狭い市街地に4～5階建ての高層建築が軒を並べる人口稠密地であった。グラスゴウやエディンバラの知識人たち lairds は所属するクラブやソサエティにおいて、あるいは酒席や流行のコーヒーハウスなどにおいて、日常的に顔と顔を合わせ、講演会や私的な公開講義（アダム・スミスが1748-50年にエディンバラで行った修辞学の公開講義が有名）に参加して講義や討論をしたり、会話 conversation に興じたりしていたのである。晩年のデイヴィット・ヒュームが、「私の人生の楽しみは学問研究と会話であった」と述懐しているのは、18世紀中葉のエディンバラの、忘れがたい体験を追憶しての発言である、と解して初めてその意味が鮮明になるのである。

ヒュームは人生の大半をエディンバラで過ごしたが、その理由はエディンバラには「いい仲間がいる I have good fellows in Edinburgh.」という理由からであった。ヒュームと親交のあった自伝作家アレグザンダー・カーライル（『衣裳哲学』や『英雄崇拜』で有名なトマス・カーライルとは別人）も、「友人たち、大学教員たち、聖職者や弁護士、さらには旅行滞在中の貴族たちと出会った街（エディンバラ）が、多様性を受け入れるに十分な大きさを持ちながら、かつ親しくなるのにちょうどいい広さであった」と回顧している。

「ロバートソン、ジョン・ヒューム、バナタイン、それに私は、全員が田舎住まいで定期的にはかエディンバラに出てこなかった。ブレアとジャーディンは市内に住んでいた。当時は夜食が一番重要だったので、私たちは最高の店で夜食を取り、その後友人たちに使い走りを送って九時半に酒場で落ち合おうと呼びかけた。急な呼び出しにもかかわらず、デイヴィッド・ヒューム、アダム・スミス、アダム・ファーガソン、ロード・エリバンク、さらには医師のブレアとジャーディンらが加わると、それはもう楽しい宴席となった。

ある晩、別の店で食事をしていたためかなり遅れて、われわれの集まり（田舎からたまたま街に来ていた穏健派牧師の集まり：モスナーの注記）に合流したヒュームが、いきなりポケットから大きな鍵を取り出してテーブルの上に置いたことがあった。女中 maid servant から

10) ステアー・ソサエティ編（戒能通厚・平松 紘・角田猛之編訳）『スコットランド法史』名古屋大学出版会、1990年、32ページ等々。

……御帰宅を待てずに寝てしまうかも知れませんが、鍵をお渡ししておきますと、手渡されたのだという。彼の女中が言うには、田舎からお上りさんたちが街に來た晩のヒューム様の御帰還が一時前だったためしはないのですから、というわけであった<sup>11)</sup>。

酒（ウイスキーではなくワインだったらしい）の席だからと言って、社交や会話の水準が低俗に墮していたわけではけっしてない。酒席に集う人間のほとんどが聖職者か、聖職者の大学教員か、友人が聖職者であるかだったのだから、その限りでは全員が体制的知識人として同質的な文化を共有していたとは言えよう。とはいえ、それぞれの専門分野が異なり、職業を異にしていたので、会話は弾み、社交も闊達を極めたであろう。そうでなければ、このような酒席から（それだけが唯一の原因ではないとしても）ジョーゼフ・ブラックとジェームズ・ワットとの永く続いた、相互に尊敬しあう関係や、ディヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの終生の友情、さらには、アダム・スミスと、彼の死後遺稿を託されたジェームズ・ハットンやジョーゼフ・ブラックとの信頼関係などの緊密で適宜的な人間関係は存在し得なかったはずである。

ところで、林達夫によれば、ルネサンスを社会史的に考察すると次の3点が浮かび上がってくる。まずはアトリエ atelier。それと「当時、各地各所に輩出する大学旧派に対抗する、一流学者たちの私設『アカデミア academia』。研究と同時に学問上の情報交換、ひいては論争をもやって、近代科学の勃興を促すのに大いに推進力となった……。……それからもう一つは広い意味での『マニファクチュア manufacture』。その三つがいわば『近代を呼び起こす』原点<sup>12)</sup>である。製作の現場、学問の場、それらを支える技術、とそれぞれを言換えてもよいであろう。さらには是非とも付け加えておかねばならないのは、これら3つの条件のすべてが同時並行的に存在しているという幸運に恵まれていなければならない、ということである。

スコットランド啓蒙期に、大学のあった都市（エディンバラ、グラスゴウ、アバデーン、セント・アンドルー）は、宗教的色彩の濃いセント・アンドルーを除き、この3条件を同時に満たす幸運に恵まれていた。さらに言えばエディンバラとグラスゴウは、都市としての性格を異にしながら、なおかつ知識人たちが絶えず行き来する緊密な知的紐帯関係にあった<sup>13)</sup>。学問の場は教育制度改革を成し遂げた大学が主として提供した。知識人は討論や会話の成果を製作現場で論考としてまとめた。まとめられた論考は地元の印刷・出版業者が書物のかたちで公刊した（ちなみに、大英百科事典 *Encyclopedia Britannica* 初版を出版したのはエディンバラの印刷業者である）。林達夫の指摘したルネサンスの社会的3条件はいわば共通の水脈のごとく、「北のアテネ」と呼ばれたエディンバラまで、すなわちスコットランドにまで、二百年の時をかけて、北上して来ていた<sup>14)</sup>のである。

11) A. Carlyle, *autobiography*, 1860, Edinburgh, p. 275.

T. C. スマウト（木村正俊監訳）『スコットランド国民の歴史』原書房2010年、517ページから再引用。ただし訳文は、E. C. Mossner, *The Life of David Hume, second edition*, Oxford University Press, 1980, pp. 244-245 に依って、大幅に変更してある。

12) 林達夫・久野収（対談）『思想のドラマトゥルギー』平凡選書1974年、125-126ページ。原語は筆者による挿入である。

13) この点は、それぞれの都市に所在するクラブやソサイエティの会員が共通していること、に如実に現れている。

14) 北政巳『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店2003年は「ルネッサンスの北上」としてスコットランドの近代化をとらえている。もともと、ルネッサンスは15世紀イタリアの文芸復興を指す

さらに、グラスゴウ大学をはじめ、スコットランドのほとんどの大学<sup>15)</sup>が市街地に立地していたことも知的活動の幅を広げ、その質を高める要因であった。イングランドの、例えばケンブリッジ大学は市街地には立地しておらず、ケンブリッジ大学が行政区のケンブリッジの中にあるのではなく、行政区の「ケンブリッジが大学の中にある」としばしば表現される。イングランドの大学(オックス・ブリッジ)とは対照的に、当時のスコットランドの大学は市街地に位置していたために、教会人や実業人、大学人や専門職人・技術者、さらには役人や地主、(宮廷は存在していなかったが)貴族<sup>16)</sup>たちが不断に、かつ容易に知的交流することが可能であった。スミスが学生として学び、教師として教えたグラスゴウ大学のあったグラスゴウをはじめとする大学諸都市はそんな歴史空間であったのである。

アダム・スミスは「国富論草稿」(現在では「法学草稿」ではなかったかといわれている)で分業論を展開しつつ、知的情報の交換としての分業、すなわち知的情報の交流の場としての市場の在り様を以下のように説明している。それは、啓蒙期のスコットランドの大学都市エディンバラとグラスゴウの知的空間を如実に示していると言ってよいであろう。

「富裕で商業的な社会では、思考または推理することが、他のあらゆる業務と同様に、ひとつのビジネスとなって、ひじょうに少数の人びとによっていとなまれる。かれらは龐大な労働する大衆が所有しているすべての思考と推理を、公共に提供するのである。誰かふつうの人に、かれの特定の職業の範囲にはいらない主題について、かれのもっているすべての知識のすべてを、偏見なくながめさせよう。そうするとかれは、自分が知っているほとんどすべてのものご

In opulent and commercial societies, besides, to think or to reason comes to be, like every other employment, a particular business, which is carried on by a very few people, who furnish the public with all the thought and reason possessed by the vast multitudes that labour. Let ordinary person make a fair review of all the knowledge which he possesses concerning any subject that does not fall within the limits of his particular occupation, and he will find

ゝしているが、ルネサンスは12世紀まで遡ることができる(ハスキンス(野口洋二訳)『十二世紀ルネサンス』創文社1985年参照)。さらに、ルネサンスは「理性」の復活とその単線の発展であると見做すべきではなく、「理性と魔術」の複合体であって、「17世紀科学革命」はおろか、アイザック・ニュートンに至るまでそうであった、と理解しなければならない。したがってまた、ニュートンやニュートン主義を単なる理神論 Deism に解消すべきではない。世界を創造するに神は最初の一撃を与えるが、その後は万有引力の法則によってすべてを説明できると主張したニュートンは同時に、ケインズも『人物評伝』で指摘しているように、錬金術に深く傾倒した「錬金術師」でもあったのである。この点に関しては、B. J. T. Dobbs の次の2著作、B. J. T. ドブス(大谷隆昶訳)『錬金術師ニュートン：ヤヌスの天才の肖像』みすず書房、2000年と B. J. T. ドブス(寺島悦恩訳)『ニュートンの錬金術』平凡社、1995年を参照のこと。

15) スコットランドの諸大学は、その設立はイングランドのオックスフォード大学とケンブリッジ大学に後れを取るものの、ブリテンではオックス・ブリッジに次いで古い設立である。また、これらの大学はすべてローランドの北部を東西に横切るベルト地帯に位置している。大学名と設立年次は以下のとおりである。University of St. Andrew (1412), University of Glasgow (1451), University of Aberdeen (1494), Edinburgh University (1581)。

16) 宮廷貴族はみなロンドンに移住してしまっており、スコットランド残留の貴族はすべて法服貴族である。そして、彼らは一代限りの貴族であった。民事裁判所判事になってケイムズ卿(Lord Kames)を名乗ったヘンリー・ヒューム Henry Home はその代表例である。

とが、書物から、若いときに受けたかもしれない文筆的教養から、あるいは学識者たちととりかわしたかもしれない時折りの会話から、二次的に得られたのだということに気がつくだろう。そのひじょうに小さな部分だけが、かれ自身の観察と省察の産物であったということに、かれは気づくだろう。そのほかのすべては、かれの靴や靴下とおなじようにして、その特定の種類の品物を市場のために作り、ととのえることをビジネスとする人びとから、購入されたのである。宗教と良俗と統治の大問題にかんし、かれ自身の幸福とかれの国の幸福にかんする、一般的諸観念のすべてを獲得してきたのである。これらの重要な問題のそれぞれにかんするかれの全体系は、ほとんどつねに、もとは他の人びとの勤労の生産物であったことが、わかるであろう。かれはかれらから自分で、あるいはかれの教育について配慮した人びとによって、他のどの商品とも同じやりかたで、自分たちの労働の生産物との交換、交易によって、取得してきたのである」<sup>17)</sup>。

that almost every thing he knows has been acquired at second hand, from books, from literary instructions which he may have received in his youth, or from the occasional conversations which he may have had with men of Learning. A very small part of it only, he will find, has been the produce of his own observations or reflections. All the rest has been purchased, in the same manner as his shoes or his stockings, from those whose business it is to make up and prepare for the market that particular species of goods. It is in this manner that he has acquired all his general ideas concerning the great subjects of Religion, morals & government, concerning the happiness or that of his country. This whole System concerning each of those important subjects, will almost always be found to have been originally the the produce of the industry of the other people, from whom, either he himself, or those who have had the care of his education, have produced it in the same manner as any other commodity, by barter & exchange for some part of the produce of their own labour.<sup>18)</sup>

## 【2】 スコットランドの宗教

ヘンリー8世の宗教改革によって生まれた英国国教会はあくまでもイングランド国教会 Church of England であって、ブリテン全体が一様に統一的な国教会制度に組み込まれたのではない。合邦後にスコットランドは国教会を形成する（1690年）ものの、スコットランド国教会 Church of Scotland はイングランドのそれとは性格をおおいに異にしている。

さらに、スコットランドでは、前世紀ノックスによる独自の宗教改革が断行されたが、このカルヴィンの直弟子ノックスの考えを継承するピューリタンの「福音派」よりも、穏健的な長老主義が主流となる事態が訪れた。この穏健的な長老派は、神学的にはリベラルで、組織的には末端の教区教会から最高議決機関である教会総会まで、「教会の意思決定に俗人信徒が平等に参加する、聖俗混合のいわばアマチュア民主主義的な運営を特徴とする」<sup>19)</sup>。

17) アダム・スミス（水田洋訳）『法学講義』岩波文庫2005、243-244ページ

18) William Robert Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, Reprints of Economic Classics edition, Augustus Kelley 1965, pp. 344-345 (originally 1937).

19) 高橋哲雄『スコットランド 歴史を歩く』岩波新書2004年、165ページ。

表2 スコットランドの教会と思想

14世紀後半	ウィクリフ John Wickliffe (1320頃-1384) の思想流入
16世紀半頃	ルターの思想流入
1555年	ノックス John Knox ( ) 「ジュネーブ礼拝規定書」作成
1560年	「スコットランド信条」。長老派教会成立
1639年	第一次主教戦争 (スコットランド長老派 vs. イングランド国教会)
1640年	第二次主教戦争 (スコットランド長老派 vs. イングランド国教会)
1668年	名誉革命
1690年	スコットランド教会の長老主義復活
1707年	イングランド・スコットランド合邦
1708年	キリスト教的知識普及協会設立
1712年	スコットランド教会, 聖職推挙権復活 <sup>20)</sup>
1715年	ジャコバイトの叛乱 (第2回は1745-6年)
1731年	エディンバラ医学会設立 <sup>21)</sup>
1745年	ジャコバイトの叛乱 (第1回は1715年)
1748年	アダム・スミス, エディンバラで修辞学・公開講義
1751年	教会総会 (長老派) で穏健派小グループ登場
1754年	セレクト・ソサエティ (選良協会) 設立
1755年	『エディンバラ・レビュー』創刊 (→1756年終刊)
1755年	ヒューム, ケイムズ卿批判のキャンペーン開始
1756年	ジョン・ヒューム『ダグラス』初演 →演劇論争勃発
1759年	ウィリアム・ロバートソン『スコットランド史』
1759年	アダム・スミス『道徳感情論』(初版) 刊行
1760年	アレクザンダー・カーライル『スコットランド民兵 militia 問題再考』
1762年	ウィリアム・ロバートソン, エディンバラ大学学長就任
1763年	ウィリアム・ロバートソン, 教会総会議長就任
1767年	アダム・ファーガスン『市民社会史』
1769年	ジェイムズ・ワット蒸気機関改良
1772年	最後の魔女裁判 (スコットランドにおける)
1776年	アダム・スミス『国富論』(初版) 刊行
1780年	ウィリアム・ロバートソン, 教会総会から隠退
1783年	ヒュー・ブレア『修辞学文学講義』(←アダム・スミス『修辞学・文学 belles lettre 講義』 <sup>22)</sup> 1762-1763)

(出所) 梅津順一「教会・大学・経済学：アダム・スミスとその周辺」(今関恒夫ほか『近代ヨーロッパの探求  
③ 教会』ミネルヴァ書房 2000年, 第5章) 170ページ, および 小嶋 潤『イギリス教会史』刀水書房,  
1998年, 258ページから作成。

20) 全教区の牧師の4分の1を王室が、残りの4分の3を教区内の地主が保持する人事権。この聖職推挙権は王政復古(1660年)後の1690年に廃止されていた。

21) 当時, エディンバラ大学は、「ヨーロッパでは並ぶものがない医学教育センターとなっていた」(高橋哲雄『スコットランド 歴史を歩く』岩波新書2004年, 173ページ。)

22) このスミスの講義ノートは『修辞学・文学講義 Lectures on Rhetoric and Belles lettre』と呼ばれ習わされてきた。ヒュー・ブレアがほぼ同一内容の『修辞学文学講義』を出版した時, そのことを知らされたスミスが、「あれは彼にあげるよ。僕には世に問うものがまだまだ沢山あるから」といったというエピソードは有名である。文学史上では、イギリスの修辞学はヒュー・ブレアを嚆矢とするとされるが、実情はノ



宗教的にも穏健派であったヒューム<sup>23)</sup>は、論稿「迷信と熱狂について」(1742年)において、「事物のうちで最善のもの腐敗は最悪のものを生み出すということは一つの格率になっているが、この格率は、多数事例がある中で、迷信と熱狂という真の宗教の腐敗物から生じる有害な結果によって一般に証明される」<sup>24)</sup>と主張している。ここでいう「迷信」とは法王教と彼が揶揄するカトリックの形式化した儀礼のことであり、「熱狂」とはノックスとその後継者である新・カルヴィン主義者の原理主義のことである。ヒュームは、一方でいかにも洗練された、しかし偶像崇拜的な儀礼に堕したカトリックを嘲笑し、返す刀で、宗教改革から始まる魔女<sup>25)</sup>裁判を断行し、音曲はおろか演劇の上演すら禁圧したピューリタン主義、新・カルヴィン主義を批判している。このことは上述のスコットランド長老派の思想とその思想的立場と軌を一にしている。スミスもヒュームも宗教的には必ずしもその立場を鮮明にはしていないが、思想的たちとしては、スコットランド啓蒙運動を牽引した穏健派知識人 (moderate literati) に属していたのである。

ところで、小嶋潤によれば<sup>26)</sup>、長老派とは、教会を「神によって選ばれたもの団体」とみなし、人間理性によらず神の意志に従うべく「会員の衆知を集める必要」から会員の中から長老と牧師を選んで教会を運営し、定期的に「会員総会」を開いて意思決定していく教会組織である。「個々の教会は、一定の地域内で相結び合い、長老会を構成してその指導にあたる仕組みである。これによって各個教会は地域的に有機的な結合を得、統合されて公同の教会を形づくるのである」。スミスは『国富論』で長老派を次のように論じている。

---

、ヒュー・ブレアがスミスの講義をまとめて出版したのであり、その間の事情は講義をしたスミスもその講義を要約し体系化して出版したヒュー・ブレアも了解していたのである。

スミスは「平易で達意の文体」を佳としたこともあって、現在オックスフォード大学とケンブリッジ大学編集の英文学史のいずれもが、18世紀の代表的散文家としてスミスの名を挙げている。

ちなみに、belles lettres はフランス語で「美しい文体ないし文学」の意味である。フランス語を外來語として使用している。このことはスコットランド文化がフランス文化の影響下にあったことのひとつの証左でもある。

- 23) ヒュームが、スミスの後任としてグラスゴウ大学論理学教授職に就くことを、スミス自身の強い推挙があったにもかかわらず、拒否されたのは、ヒュームが無神論的傾向を持っているという風説に拠るといふよりも、当時大学教授職に就くための要件のひとつに啓示宗教について授業しなければならないという条項があったためである。もちろんこのような授業はヒュームのよくなるどころではなかった。

ヒュームの宗教論が彼の道徳論の不可欠の基盤になっているとの注目すべき主張が最近展開されている (Thomas Holden, *Spectres of False Divinity: Hume's Moral Atheism*, Oxford University Press, 2010)。

- 24) *Superstition and Enthusiasm* (1742) in T. H. Green and T. H. Grouse eds., *David Hume The Philosophical Works* Vol. 3, p. 144. (デイヴィッド・ヒューム (福鎌忠恕・斎藤繁雄訳)『奇蹟論・迷信論・自殺論』法政大学出版局, 1985年, 60ページ。一部訳文を変更した。) また, *Natural History of Religion*, (1757) in T. H. Green and T. H. Grouse eds., *David Hume The Philosophical Works* Vol. 4, p. 340. には, 「最善の事物の腐敗が最悪の事物を生むという事実」という表現が再録されている (デイヴィッド・ヒューム (福鎌忠恕・斎藤繁雄訳)『宗教の自然史』法政大学出版局, 1972年, 65ページ)。

- 25) 魔女迫害法は1563年に成立したが、1722年の最後の魔女裁判まで続いた。また、魔女と偶像崇拜はカルヴァン主義の二大攻撃対象であった。浜林正夫『魔女の社会史』未来社 1978年28-8ページも参照。

- 26) 小嶋潤『イギリス教会史』刀水書房, 1998年, 94ページ。

「おそらくヨーロッパ中どこへ行っても、オランダ、ジュネーブ、スイス、スコットランドの長老派教会僧侶の大多数のもの以上に、学識があり、上品で、独立心が強く、尊敬すべき人々の集まりを見だすことは稀である」。

(Ⅲ. 195-96ページ<sup>27)</sup>)

「教会の聖職者が、大部分、ちょうど多すぎもしなければ少なすぎもしないという国では、大学の教授職は、一般に教会の聖職禄以上に定収入の多い地位である。この場合だと、大学は、その成員を、その国の教会人なかから引き抜いたり、選り抜いたりできるのであって、教会人は、どの国でも、文筆家のうちで、ずば抜けて最大多数の階級を成しているのである。これと反対に、教会の聖職禄が、大部分、非常に高いところでは、教会は、自然に、大学から優れた文筆家の大部分を引き寄せてしまう。何せこういう文筆家となると、たいてい、教会の高い地位を斡旋しては、それを自分の名誉と心得るような聖職推薦権者を見つけるに事欠かないのである。前のほうの状況だと。大学は、その国で求められるかぎりの、もっとも優れた学者で満たされる」。

(Ⅲ. 197ページ)

「キリスト教世界で、最も富裕な教会でさえも、このひどく貧しい寄付財産しかないスコットランドの教会以上立派に、国民大衆のあいだで、信仰の統一性、帰依の熱心さ、秩序の精神、規律正しさ、きびしい道徳をたもっていない。スコットランドの教会は、およそ国教が生み出すと考えられる聖俗両面の、ありとあらゆるよい効果を、他のどこの教会にも劣らず、完全に生み出している」。

(Ⅲ. 202ページ)

There is scarce perhaps to be found any where in Europe a more leaned, decent, independent, and respectable set of men, than the greater part of the Presbyterian clergy of Holland, Geneva, Switzerland, and Scotland.

(WN. V. i.g. 37,<sup>28</sup>)

In countries where church benefices are the greater part of them very moderate, a chair in a university is generally a better establishment than a church benefice. The universities have, in this case, the picking and chusing of their members from all the churchmen of the country, who, in every country, constitute by far the most numerous class of men of letters. Where church benefices, on the contrary, are many of them very considerable, the church naturally draws from the universities the greater part of their eminent men of letters; who generally find some patron who does himself honour by procuring them church preferment. In the former situation we are likely to find the universities filled with the most eminent men of letters that are to be found in the country.

(WN. V. i.g. 39)

The most opulent church in Christendom does not maintain better the uniformity of faith, the fevour of devotion, the spirit of order, regularity, and austere morals in the great body of the people, than this very poorly endowed church of Scotland. All the good effects, both civil and religious, which an established church can be supposed to produce, are produced by its as completely as by any other.

(WN. V. i.g. 41)

27) 大河内一男監訳『国富論』Ⅲ, 中公文庫, 1978年。

28) Adam Smith (Campbell, Skinner & Todd eds.), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume 2, Oxford University Press, 1976, WN. 5. i.g. 37 などの略記は, Book V, chapter 1, the 7th section, the 37th paragraph を示す。

### [3] スコットランドの大学改革

啓蒙期スコットランドの大学ではそれまでのクラス担任制（regent system）から講座制に教育体制が大きく変更された。この結果，研究と教育に著しい発展が達成されて，啓蒙期スコットランドの諸大学はヨーロッパ各地から注目される存在となった。特にエディンバラ大学の医学部は，かつての中心地であったオランダのライデン大学にとって替わって「ヨーロッパの医学教育センター」となった。

ところで，スミスの時代（1752年当時）のグラスゴウ大学の改編なった講座の構成は以下の表3のようなものだった<sup>29)</sup>。

表3 グラスゴウ大学（1752年当時）の講座編制

哲 学	① 自然哲学
	② 道徳哲学
	③ 論理学
文 学	④ ギリシャ語
	⑤ 人文学（ラテン語）
自然哲学関係講座	⑥ 数 学
	⑦ 天 文 学
専門職課程	⑧ 神 学
	⑨ 東 洋 語
	⑩ 教会 史
	⑪ 法 学
	⑫ 医 学（理論診療）

スミスは，1751年グラスゴウ大学着任当初は③の論理学を担当していたが，翌1752年前任者の死去に伴い②の道徳哲学の担当教授に転じた。ジョーゼフ・ブラックは1756年になってのことだが，⑫医学（理論・診療）の担当教授に就任した。また，スミスの学生であったジョン・ミラーは⑪法学の担当教授に就任している。

### [4] ジャコバイト

ジャコバイト Jacobites とは1688年の名誉革命で王位を追われフランスに亡命したジェームズ二世 James II の支持者のことである。名誉革命でウィリアム三世としてイギリスの王位に就いたヴィレム（妻メアリ三世と共同統治）はオランダから招かれたが，当時イギリスはオランダと連繫して巨大な強敵フランスと対峙していた。ローマカソリック寄りで親フランス的なジェームズ二世の政策を覆し，イングランド国教会制度下で反フランスを旗印に掲げるウィリアム三世の政策は，ジェームズ二世の王統こそがステュアート朝の正統だとする王党派（トーリ）の抵抗勢力を生み，スコットランド王であったジェームズ二世の王統の故国スコットランドでは反ウィリアム感情が渦巻いていた。この感情は容易に親フランス感情に転移するものであった。実際にこの時期のスコットランドからの外国諸大学への留学先はそれまで圧倒的多数を占めたオックスフォード大学から，

29) 福鎌忠恕「参考論文」（デューゴルド・ステュアート（福鎌忠恕訳）『アダム・スミスの生涯と著作』御茶の水書房，1984年所収）256-257ページを参照。

フランスの諸大学へと大幅に変更された。

ところで、ジャコバイトは1708年と1715年にジェームズ二世の子エドワード James Francis Edward Stuart が叛乱するも失敗する。叛乱軍はフランスの後押しによってフランスから出陣し、親フランス的でジャコバイトが多数存在するハイランド（スコットランド高地地方）の西海岸から上陸した。1745-46年の2度目の叛乱はジェームズ二世の孫 Charles Edward Stuart の叛乱である。1度目と同様のコースで侵攻し、叛乱軍はエディンバラに入城、一時はダービーに至り、ロンドンにも迫ろうかという勢いであったが、1746年カローデン Culloden<sup>30)</sup> で決定的敗北を喫し、以後急速にその勢力を失った<sup>31)</sup>。

カローデンの決定的敗北は、スコットランドに自国の防衛に不可欠な「民兵」と敗者への共感にもとづく「スコットランド人らしさ Scottishness」に関する広汎で強力な論争と運動を惹き起した。イングランドでは法律化されたにもかかわらず、スコットランドでは許されなかったスコットランド民兵制度 Scottish Militia に関する論争はローランド（スコットランド低地）地方の穏健知識人によって中心的に担われたが、そこには尚武の精神 the martial spirits に富むハイランド兵士を手本にスコットランドの政治的アイデンティを創出としようとするローランド人の屈折した憧憬と軽蔑の入り混じった感情が伏在していた。大陸ヨーロッパ（特にドイツ）人がハイランド人にルソーの「高貴な未開人」の幻影を見出そうとするロマン主義的傾向はローランド人には稀薄であったが、スコットランドのアイデンティ喪失の危機と新たなアイデンティ創出という危急の課題にとっては、ジャコバイトの叛乱に際立ったハイランドの「尚武の精神」をことさらに称揚せざるをえなかったのである。

「スコットランド人らしさ」は文芸においてはスコットランドの「ロマンチック・アイデンティ」（高橋哲雄）の創出が試みられた。スコットランド古来の文化の復興という形をとった偽作「オシアン」はその典型である。「オシアン」はジェイムズ・マクファーソンがハイランドの古代ゲール語写本から英語に翻訳したと主張した英雄叙事詩であるが、本国スコットランドでよりも、イングランドや大陸ヨーロッパにおいて文学に大きな影響を与えた。ゲーテは『若きウェルテルの悩み』において、愛を語るウェルテルに「オシアン」の一節を朗詠させているし、後年大陸ヨーロッパ・ロマン主義を代表者するメンデルスゾーンは「オシアン」の英雄に因んだ序曲「フィンガルの洞窟」を作曲している。

スコットランドはもともと文化的にはイングランドとの関係よりも、「ドーヴァー海峡を迂回して」直接大陸ヨーロッパ、とりわけフランスとの関係が深かったが、啓蒙期のスコットランドとフランスとの文化的な共時関係は顕著である。しかし、この点の本格的な研究は未だ端緒に就いたばかりである<sup>32)</sup>。

30) スミスはオックスフォード大学から故郷カーコーデイ Kirkcudly への帰途、この古戦場を目の当たりにして感慨に深っている。

31) James Stuart はこの後大陸に亡命し、1763年ジョージ3世の恩赦によって帰国。1767年に『経済学原理 An Inquiry into the Principles of Political Economy』を出版した。

32) D. Dawson and P. Morère eds., *Scotland and France, in the Enlightenment*, Rosemont Publishing & Printing Corp., 2004 を参照。

## [5] クラブとソサエティ

既に指摘したように、クラブとソサエティは18世紀英国の思想・政治・文学・文化等々の運動を理解する上で欠くことのできないものである。小林章夫の研究<sup>33)</sup>によれば、18世紀に興隆を極めたクラブは18世紀のブリテンを理解するには欠かせない要素であるが、それは、「政治的色彩の強いクラブ」、「文芸的色彩の強いクラブ」、「社会の異端や好事家の集まるクラブ」の3類型に分類できる。ただし、小林章夫はイングランドのクラブを詳細に紹介してはいるが、スコットランドのクラブに言及するところはほとんどない。とはいえ、スコットランドにおけるクラブもイングランドのそれとほぼ同様の傾向を示していたといっていよう。ヘル・ファイア・クラブ Hell Fire Club<sup>34)</sup>のような「社会の異端家の集まるクラブ」をはじめ、「無数の紳士クラブがスコットランドにはあったが、こうしたクラブを通してスコットランド啓蒙主義の哲学的あるいは実践的論考の多くは生まれた」<sup>35)</sup>。

しかし、スコットランド啓蒙主義期のクラブを特徴づけるのは、凝縮された情報交換と活発な知的創造という点である。アダム・スミスが所属していたと確認できるクラブ・ソサエティを以下に採りあげてこのことを確認しておこう。

川原和子の研究によれば、スミスが所属していたと確認できるクラブ・ソサエティは以下の8つである<sup>36)</sup>。

- ① オイスター・クラブ (Oyster Club 1760年代-90年代)
  - ② エディンバラ哲学協会 (Philosophical Society of Edinburgh 1737-83)
  - ③ ポーカー・クラブ (Poker Club 1762-84)
  - ④ エディンバラ・選良協会 (Select Society of Edinburgh 1754-63)
  - ⑤ Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland 1761-
  - ⑥ グラスゴウ文学協会 (Glasgow Literary Society 1752-)
  - ⑦ グラスゴウ政治経済学クラブ (Glasgow Political Economy Club 1743-)
  - ⑧ Edinburgh Society for the Encouragement of Arts, Sciences, Manufactures, and Agriculture 1755-
- ① オイスター・クラブはスミスが最も足繁く通った、気の置けない隠れ家 resort のごとき空間であった。グランドツアーから英国に帰った直後、スミスは故郷カーコーディに立ち寄る間も

33) 小林章夫『クラブ：18世紀イギリス——政治の裏面史』駿々堂1985年。「政治的色彩の強いクラブ」、「文芸的色彩の強いクラブ」、「社会の異端や好事家の集まるクラブ」の3類型に分類している。ただし、イングランドのクラブを詳細に紹介しているが、スコットランドのクラブには言及していない。

34) イーヴリン・ロード (田口孝夫・田中英史訳)『ヘル・ファイア・クラブ：秘密結社と18世紀英国社会』東洋書林2010年、を参照。

35) イーヴリン・ロード (田口孝夫・田中英史訳)『ヘル・ファイア・クラブ：秘密結社と18世紀英国社会』東洋書林2010年 (第8章「スコットランドと地獄の業火」) 251ページ。

36) 川原和子「スコットランド啓蒙期の主要学・協会、クラブについて：付・関連刊本および MSS. リスト」経済資料協議会『経済資ページ, 料研究』No. 24, 1993年, 1-68ページ。

なくエディンバラに移り住んだ。エディンバラにあったこのクラブは「青春時代の共通の経験を懐かしみ、若い日の交友を甦えらす」ことをモットーとした同窓会的で閉鎖的なクラブであった。

- ② エディンバラ哲学協会は数学者マクローリンの発議で、Medical Society から分離設立された、科学と哲学と文芸が融合したスコットランド啓蒙期の代表的クラブであった。
- ③ ポーカー・クラブはスコットランド民兵計画を喧伝し、愛国心を鼓舞する意図をもって、アダム・ファーガソンによって創設された文芸（政治的ではない）クラブである。「ポーカー」という名称は、いやしくも当協会の会員たる者は世論を啓蒙する「火掻き棒 poker」たれという運動の理念を象徴している。
- ④ エディンバラ・選良協会は画家のアラン・ラムジーが親交のあったヒュームやスミスと Debating Society を作ろうと計画する過程で生まれた。毎水曜日 Advocate's Library に集った。この図書館はヒュームが館長を務めていた。グラスゴウ文学協会と同様の領域を活動範囲としていた。この協会から2つの小部会⑤と⑧が派生した。
- ⑤ Select Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland の設立に関してもアラン・ラムジーがヒュームとスミスに相談を持ちかけている。スミスは言語起源論（当時流行の主題）をこの協会の機関誌 Philosophical Miscellany, I, 1761 に寄稿している。この寄稿文 Consideration concerning the first formation of languages は後に『道徳感情論』第3版（1767年）以降にその付録として収められた。

なお、この協会は、⑧とともに、エディンバラ・選良協会の小部会 subsidiary societies from Select Society of Edinburgh を構成しており、エディンバラ・選良協会が哲学的活動を統括していたのに対して、それぞれ産業経済的活動と文化的活動を分掌していたと考えられる。

- ⑥ グラスゴウ文学協会はエディンバラ哲学協会と同様の領域を活動範囲としていた。創設会員12名の一人であるスミスは1752年1月23日の会合で公刊まもないヒュームの「商業について Of Commerce 1752」について報告している。
- ⑦ スミスがグラスゴウ政治経済学クラブに加入したのは1751年で、1764年まで在籍している。『国富論』の有名なピン・マニュファクチュア論の現場は、スミスがこの協会で知人から紹介されたものと思われる。

ちなみに、ヒュームとスミスが共に所属していたクラブ・ソサエティは、ポーカー・クラブ、グラスゴウ政治経済学クラブ、エディンバラ・選良協会、エディンバラ哲学協会、グラスゴウ文学協会の5つを数える（⑧を含めれば6つとなる）。

## [6] キルトとスコッチ

キルトを纏いバグパイプを奏でる風景は、スコットランドを代表する文化であり、古くから存在したスコットランド固有の文化であるという誤解が流布している。しかし、キルトは1707年の合邦後の近代に、森林伐採の作業着として（1768年になって初めてこの起源説は発表されている）発明され、ハイランド連隊の軍服として採用され、当時興ったスコットランド復興の流れに乗り、あたかもスコットランド古来の、かつ独自の文化の復興として「捏造」されたものである。合邦後に、スコットランドの文化的アイデンティ確立の目的を持って「創造された伝統」（ホブズボーム）のひとつである。

ところで、スコットランドは標高180メートルのいわゆるハイランド・ラインによって、ハイランド（高地地方）とローランド（低地地方）に分かたれる。啓蒙期、ハイランドの主たる産業は牧畜と漁業であり、ローランドの主たる産業は農業と製造業であった。したがって、ハイランドは製造業の振興に勤め、ローランドは農業の振興に勤めたのである。また社会的には、ハイランドには部族制が残っていたのに対し、ローランドはイングランドと文化的産業的同質化の過程にあった。合邦前ハイランドとローランドは、まるで二つの国（two countries）の様であった。この「一国二制度」のごとき状況に終止符を打ったのは、1707年の合邦であり、1745年のジャコバイト叛乱の決定的敗北である。2つの事件を契機にスコットランドはそのアイデンティティを改めて問わざるをえなくなった。

ヒュー・トレヴァー＝ローパーの「伝統の捏造：スコットランド高地の伝統」は具体的にキルト着用過程と伝統捏造の事実関係を明快かつ詳細に明らかにしながら、その歴史的意味を鮮明にしている。トレヴァー＝ローパーによれば、ハイランド地方の「伝統を創造すること、およびその外的な表象を伴った新たな伝統をスコットランド民族全体に負わせることが行われたのは、18世紀後半から19世紀初期のことであった。それは三段階を経て行われている。第一に、……アイルランド文化を篡奪し、初期のスコットランドの歴史を書き改めて、……ケルト的スコットランド……こそが『母なる国』であり、アイルランドは文化的に依存しているという不遜な申し立て」をすることであった。

第二段階は、ハイランドの新たな伝統を「人工的に作り出し、それを古来からの独特でまごうことなき伝統として提示すること」であった。

第三の最後の段階は、「それらのあらたな伝統を」歴史あるローランド地方などに押し付け、ローランド地方も「それらを受容するという過程」<sup>37)</sup>であった。

\*

キルトとは対照的に、ウイスキーは「創造された伝統」とは必ずしも言えない。

ウイスキーは、一つの蒸留所から供給されるシングルモルト・ウイスキーと幾つかのモルトと純度が高く大量生産可能なアルコールをブレンドするブレンド・ウイスキーに分類することができる。しかし、ウイスキーは元来シングルモルトとして生まれた地酒であって、ブレンド・ウイスキーが生まれるのは純度の高いアルコール（ジンの生産にも使われる）が大量に生産できる工業技術が開発されてからのことである。ブレンド・ウイスキーによってウイスキーは地酒の性格を脱し世界の酒となったのである。現在では、スコッチ・ウイスキー、バーボン・ウイスキー<sup>38)</sup>、ジャパニーズ・ウイスキー、カナディアン・ウイスキー、その他のウイスキー<sup>39)</sup>と世界的な広がりを見せている。

ブレンド・ウイスキーはオールド・パー（販売量のほとんどが日本向け）、バルンタイン（バレ

37) ヒュー・トレヴァー＝ローパー「伝統の捏造：スコットランド高地の伝統」（ホブズボウム・レンジャー 編著（前川・梶原ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店 1983年第2章））31-32ページ。

38) 日本ではバーボン bourbon と通称されているジャック・ダニエル Jack Daniel's はバーボンとしての要件のひとつであるケンタッキー州産ではないので、バーボンではなくテネシー・ウイスキーが正式呼称である。

39) アイリッシュ・ウイスキー、ウェリッシュ・ウイスキーなど。

ンタインと誤って呼ばれる), カティーサーク (大航海時代の帆船名) など馴染の銘柄があって一般によく知られているが, シングルモルト・ウイスキーのほうは, 狭隘な地域の小規模蔵元 brewery で蒸留されるので, 銘柄は限定される。例外的に, 唯一世界的販売量を誇るのは (日本では驚くほど販売量の少ない) グレンフィディック Glenffidich である。

18世紀のスコットランドでは, シングルモルトに高額な酒税が掛けられていた。蒸留業者は高額なモルト税を避けるために, 峡谷の奥深くに蒸留所を移して「密造酒」を作り続けた。その後, 財政難に悩む政府の脱税摘発行動と蒸留業者の抵抗運動との熾烈な抗争があって, 最終的にはモルト税の税率を引き下げると同時に, モルトの樽に施錠するなど出荷量を厳格に管理するという妥協が両者の間でなされて, 抗争は一応の決着を見た。シングルモルトの銘柄に, 前述のグレンフィディック Glenffidich のように, グレン (Glen 溪谷) という名前の冠されたものが多い歴史的な理由は, ここにある。

ケルトの時代に発明されたウイスキーはケルト語でウイスゲ・ベーハー Uisge-beatha と呼ばれた。これは, ほとんどの酒がそうであるようにケルト語の「命の水」の意味である (ワインもフランス語の eau de vie が vin に変化した)。ウイスゲ・ベーハー Uisge-beatha → ウスケボー Usquebaugh → ウイスキー Usky と訛音して, 現在は Whisky と表記されるようになった。そして, 今われわれはそのように呼び慣わし, それを愛飲しているのである<sup>40)</sup>。

## 引用文献一覧

(出版年順)

### 【邦文文献】

- (1) 林 達夫・久野 収『思想のドラマトウギ』平凡選書1974年
- (2) 浜林正夫『魔女の社会史』未来社1978年
- (3) 梅棹忠夫・開高健監修『ウイスキー博物館』講談社, 1979年
- (4) J. M. ケインズ (大野忠男訳)「人間ニュートン」(『人物評伝』(『ケインズ全集』10巻 東洋経済新報社, 1980年 所収)
- (5) ヒュー・トレヴァー＝ローパー「伝統の捏造: スコットランド高地の伝統」(ホブズボウム・レンジャー 編著 (前川・梶原ほか訳『創られた伝統』紀伊國屋書店1983年
- (6) 福鎌忠恕「参考論文」デューゴールド・ステュアート (福鎌忠恕訳)『アダム・スミスの生涯と著作』御茶の水書房, 1984年
- (7) ハスキンス (野口洋二訳)『十二世紀ルネサンス』創文社1985年
- (8) 小林章夫『クラブ: 18世紀イギリス——政治の裏面史』駈々堂1985年
- (9) ステアー・ソサエティ編 (戒能通厚・平松 紘・角田猛之編訳)『スコットランド法史』名古屋大学出版会, 1990年
- (10) 川原和子「スコットランド啓蒙期の主要学・協会, クラブについて: 付・関連刊本および MSS. リスト」経済資料協議会『経済資料研究』No. 24, 1993年
- (11) B. J. T. ドブス (寺島悦恩訳)『ニュートンの錬金術』平凡社, 1995年
- (12) 土屋 守『モルトウイスキー大全』小学館, 1995年
- (13) 小嶋 潤『イギリス教会史』刀水書房, 1998年
- (14) 関 劭『スコットランド経済とアダム・スミス』ナカニシヤ出版1998年
- (15) ロザリンド・ミスチン編 (富田理恵・家入葉子訳)『スコットランド史: その意義と可能性』未来社1998年



- (16) B. J. T. ドップス (大谷隆昶訳) 『錬金術師ニュートン：ヤヌスの天才の肖像』みすず書房, 2000年
- (17) 北 政巳『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店2003年
- (18) 高橋哲雄『スコットランド 歴史を歩く』岩波新書 2004年
- (19) T. C. スマウト (木村正俊監訳) 『スコットランド国民の歴史』原書房, 2010年
- (20) イーヴリン・ロード (田口孝夫・田中英史訳) 『ヘル・ファイア・クラブ：秘密結社と18世紀の英国社会』東洋書林, 2010年

## 【英文文献】

- (1) David Hume, *Superstition and Enthusiasm* (1742), in T. H. Green and T. H. Grouse eds., *David Hume The Philosophical Works Vol. 3*  
 デイヴィッド・ヒューム (福鎌忠恕・斎藤繁雄訳) 『奇蹟論・迷信論・自殺論』法政大学出版局, 1985年
- (2) David Hume, *Natural History of Religion*, (1757) in T. H. Green and T. H. Grouseeds., *David Hume The Philosophical Works Vol. 4*  
 デイヴィッド・ヒューム (福鎌忠恕・斎藤繁雄訳) 『宗教の自然史』法政大学出版局, 1972年
- (3) C. R. Fay, *The World of Adam Smith*, Heffer & Sons, 1960
- (4) William Robert Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, Reprints of Economic Classics edition, Augustus Kelley 1965
- (5) Adam Smith (Campbell, Skinner & Todd eds.), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, Volume 2*, Oxford University Press, 1976  
 アダム・スミス (大河内一男監訳) 『国富論』Ⅲ, 中公文庫, 1978年
- (6) Adam Smith (Bryce ed.), *Lectures on Rhetoric and Belles Lettre*, Oxford University Press, 1983  
 アダム・スミス (水田洋・松原慶子訳) 『修辞学・文学講義』名古屋大学出版会, 2004年
- (7) Adam Smith (Meek, Raphael and Stein eds.), *Lectures on Jurisprudence*, Oxford University Press, 1978  
 アダム・スミス (水田洋訳) 『法学講義』岩波文庫, 2005年 (「ノート B」の訳)
- (8) E. C. Mossner, *The Life of David Hume, second edition*, Oxford University Press, 1980
- (9) John W. Yolton, John Valdimir Price and John Stephens eds., *Dictionary of Eighteenth-Century British Philosophers, Vol. 1 & Vol. 2*, Thoemmes Press, 1999
- (10) D. Dawson and P. Morère eds., *Scotland and France, in the Enlightenment*, Rosemont Publishing & Printing Corp., 2004
- (11) Thomas Holden, *Spectres of False Divinity: Hume's Moral Atheism*, Oxford University Press, 2010

## 基本文献一覧

(出版年順)

- (1) D. Forbes 'Sceptical Whiggism, Commerce, and Liberty' in *Essays on Adam Smith*, Oxford University Press, 1975
- (2) K. Haakonssen *The Science of a Legislator*, Cambridge University Press, 1981  
 クヌート・ホーコンセン (永井義雄・鈴木信雄・市岡義章訳) 『立法者の科学：デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学』ミネルヴァ書房, 2001年
- (3) Campbell & Skinner eds. *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*, John Donald Publishers LTD, 1981
- (4) I. Hont & M. Ignatieff eds. *Wealth and Virtue*, Cambridge University Press, 1983  
 ホント&イグナティエフ編著 (水田 洋・杉山忠平監訳) 『富と徳』未来社, 1990年
- (5) C. Camie Experience and Enlightenment, *Edinburgh University Press*, 1983
- (6) I. Jones ed. *Philosophy and Science in the Scottish Enlightenment*, John Donald Publishers LTD, 1988
- (7) T. M. Devine ed. *Improvement and Enlightenment*, John Donald Publishers LTD, 1989

- (8) M. A. Stewart ed. *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment* Oxford University Press, 1990
- (9) P. Wood ed. *The Scottish Enlightenment*, University of Rochester Press, 2000
- (10) A. Broadie *The Scottish Enlightenment*, Birlinn, 2001
- (11) A. Broadie ed. *The Cambridge Companion to The Scottish Enlightenment*, Cambridge University Press, 2003